

幼稚園における英語活動の実践的研究

米 田 佐 紀 子
前 垣 内 紀 三 子

はじめに

本稿は3年目に入った幼稚園での英語活動についての実践報告である。本年度は昨年までの2年間と比べ、2点の大きな違いがある。まず、日本人だけで行ってきた英語活動の指導員に外国人指導員が加わったこと、また、それに加えて、昨年度まで年長児のみの1年間だった活動が、年中・年長と2年間にわたる活動になったことである。

我々が行っている活動は、「英語活動」と呼んではいるものの、英語学習を主眼に考えた英語教育である。たとえ1週間に20分のクラスであっても、幼児の発達に合った教材、提示方法、教授方法はいかなるものか、いかに触れさせれば効果的か、どれくらい反復させるのが良いか等を常に念頭に置いて行っている。

時々、幼稚園で英語を習わせても無意味であるという意見があるが、幼稚園以降も子供たちの成長に合わせた指導や教材によって、継続的・体系的に行っていく事ができれば、その価値は大きいと考えている。実際、2年目に入った子供たちは、1年目では見られなかった成長を見せている。

そこで本稿では、第一章で英語活動の概要、第二章で聞き取りテストについて、第三章では保護者と担任教師対象に行ったアンケートと考察、という3点を柱に述べていく。執筆者にあたって、第三章を前垣内が担当し、米田が残りの部分を担当した。

第一章 活動の概要

前垣内と米田は昨年に続き、2002年度も金沢市内の私立幼稚園で英語活動を行っている。昨年度から年中児と年長児の2学年が英語活動を行う事になり、本年度の年長児は2年間に渡って英語活動を経験していることになる。1週間に20分の活動であるが、両方の学年で8クラスになることから、前垣内と米田が分担して行っている。年中児5クラスは同じ教案を使って3クラス・2クラスと分担し、年長児は前垣内が教案作成と指導の両方を担当している。外国人指導員が加わったのは5月からであるが、都合により途中帰国となったため、10月から別の外国人指導員に交替した。

活動では、日本人指導員と外国人指導員が主に指導し、担任教師は子供たちの理解を助けたり、活動態度が乱れるのを防ぐ役割をしている。

第1節 幼稚園の概要

この幼稚園は、コンピューターや器械体操等を取り入れたいわゆる早期教育に熱心な大規模幼稚園である。子供達は文字やドリルなどに触れる機会がある。今回の聞き取りテストでも鉛筆を持つ事やテストを受けることに対して、どうして良いか分からないなどの動揺は見られなかった。

第2節 活動の目的

まず、2001年度から2002年度に変わる段階で幼稚園教師と指導員が集まり、2001年度の反省と2002年度に向けて目的や方向性の確認を行った。目的は以下の通りである。

目的：

- ①英語のリズムを身につける。
- ②簡単な挨拶ができる。
- ③英語を聞いて英語と分かる。
- ④基礎的な語彙なら聞いて、何について指しているか分かる。
- ⑤正しい発音ができる。
- ⑥文化的な行事等を疑似体験する。
- ⑦異人種を見ても同じ人間として対応できる能力を身につける。

ここで目的がどの程度達成されているかを考察していく。まず、①の「英語のリズム」であるが、②の挨拶、単語の導入では必ず毎回チャンツにのせたり、リズムを取ったりして行っている。それによって英語特有の強弱と同時にリズムが身につくだけでなく、子供たちも楽しいと感じ、また覚えやすくもなっている。

②の「挨拶」では、子供たちが日頃の生活で外国人と出会った時に必要となる語句は何かという観点から選んだものである。名前、挨拶、年齢というのが一般的な初対面の挨拶であろう。そこで毎回名前を聞くのも変かもしれないが、定着には繰り返しが必須なので、次のパターンを定型パターンとして毎時最初に行う事とした。

教師： **What's your name?** (太字を強く読む。)

子供： **My name is** (各自の名前) .

教師： **How are you?**

子供： **Fine, thank you. How are you?**

教師： **Fine, thank you. How old are you?**

子供： **I'm five/six.**

上記定型会話すべてをするのは年長児で、年中児は1学期の間は講師の“**Fine, thank you.**”までとし、2学期に入って、指導員に聞き返す部分を入れるようにした。最初から1人ずつやるのは子供にとって負担なので、まず全体でやり取りし、流れに慣れさせる。全体が終わったら個人個人に聞いていくので、名前や年齢は自分のものを使うように指導している。

1学期間は、年中児にとって教室内でも難しかった受け答えが、2学期になると教室以外の場面でも言える子供を見掛けるようになった。年長児は個人差があるものの教室外でも受け答えができる子供が多いように感じている。

③の「英語を聞いて英語と分かる」ことについては、特にカタカナとの区別を念頭に置いている。子供は一般的に音に敏感である。日本人指導員が、外国人指導員の名前をカタカナ発音で「タニヤ」と言うと、「“Tanya”でしょう。」と発音を直す子供もいた。しかし、「アップル、オレンジ、グレープ」など生活に密着しているカタカナ英語は、意味の定着が早い代わりに発音の面で見逃されてしまうようである。

④の「基礎的な語彙の聞き分け」については、③と重なるがカタカナで日本語に入っているものは定着しやすい半面、日本語に入っておらず実生活でもあまり触れないものは定着しにくいようである。詳しくは、第2章の語彙の聞き取りテストのところで考察していく。

⑤の「正しい発音」については、当初予想していた以上に個人差が大きい。一般的に幼児は音に敏感で発音も良いといわれているが、同じように指導をしているつもりでも、幼稚園教師が驚くほど上手く真似る事ができる子供もいれば、聞いたものを日本語の音韻ルールに直して発音する子供もいる。このことについては、無理に矯正しようとする、却って発音がおかしくなったり子供が英語嫌いになったりする、全体に注意を呼びかけ、その際に1人ずつ当てていく方法を取っている。第三章で「子供の発音が悪くがっかりだ」という保護者からの指摘があるが、実際問題として、対応はむずかしい。

⑥の「文化的行事の疑似体験」については、昨年度はイースター、ハロウィン、クリスマスについて行ったが、今年度はイースターがあまりぴんと来ないという幼稚園側からの意見から、取り止めとなった。

ハロウィンでは文化的背景の説明を幼稚園教師に日常生活の中でしてもらおうよう頼み、英語活動の中では絵本によって Trick-or-Treating を繰り返し行った。ハロウィンの当日は、メキシコからアメリカやカナダに入ったというピニャータ割りにも挑戦した。最近は輸入業者を通して異文化体験用の教材が、簡単に入手できるようになったことを痛感する。

⑦の「異人種に対する肯定的な態度の育成」については、外国人指導員が入る初日に、担任教師から、目や肌の色が違って同じ人間で大人なのだから、突然触ったり笑ったりという失礼な事はしないようにという注意をもらった。それでもやはり肌や髪の色が違う人が前に現れると戸惑う子供もいたようだ。しかし、毎週触れ合う事により異人種に対して奇異な目で見るとか、無礼な態度をとると言うようなことは見られていない。また、10月に外国人指導員が交替になった時は、全く違和感が無いようであった。

上記のように、目的は概ね達成されていると感じているものの、聞き取りや発音という点で評価の工夫と指導の向上も必要であると考えます。

第3節 活動の内容

2002年3月の段階で、今年度の指導内容を昨年度の反省に基づいて次の表のように作った。これ

を文化的なものやテーマによって並べ替えて活動で使用している。なお、年度途中で使用したい教材に出会った場合、そちらを表の教材の代わりに使うなどしているので、実際の活動とは多少ずれが生じている。

表 教材一覧 (教材の出典については章末を参照)

物語	<ol style="list-style-type: none"> 1. <i>Where's Spot?</i> 2. <i>Polar Bear, Polar Bear, What Do You Hear?</i> 3. <i>Where's the Halloween Treat?</i> 4. <i>The Story of Christmas</i> (紙芝居) 5. <i>Five Little Monkeys</i> 6. <i>The Very Hungry Caterpillar</i> (年長のみ) 7. 「くしんぼごりら」エロンシアター 8. 「3匹の子豚」の本・エロンシアター
チャンツ	<ol style="list-style-type: none"> 1. 挨拶 指導員: <i>What's your name?</i> 子 供: <i>My name is ...</i> 指導員: <i>How are you?</i> 子 供: <i>Fine, thank you. How are you?</i> 指導員: <i>Fine, thank you.</i> 2. 指導員: <i>How old are you?</i> (年長のみ) 子 供: <i>I'm five/six</i> 3. <i>What's this? What's this? Can you guess?</i> 4. <i>What color is this?</i> 5. <i>What do you want to do?</i> 6. <i>I like ...</i>
歌	<ol style="list-style-type: none"> 1. <i>Good Morning to You</i> (song) 2. <i>Good Bye Song</i> 3. <i>The Wheels on the Bus</i> 4. <i>We Wish You a Merry Christmas</i> 5. <i>Jingle Bells</i> 6. ハロウィーンの歌 (<i>Ten Little Indians</i> と同じメロディで) 7. <i>When Dogs Get up in the Morning, They Always Say "Good Day."</i>
手遊び・体遊び	<ol style="list-style-type: none"> 1. <i>Five Little Monkeys</i> の手遊び 2. <i>Head, Head. Nod, Nod, Nod.</i> 3. <i>Head, Shoulders, Knees and Toes</i> 4. <i>Seven Steps</i> 5. <i>One Elephant Went Out to Play</i> 6. <i>A Chubby Little Snowman</i> 7. <i>Family Members</i> 8. <i>Ring Around the Roses</i> 9. <i>Ring Those Bells and Turn Around</i> 10. <i>Here is the Chimney</i> 11. <i>Christmas Day will Soon Be Here</i> 12. <i>Walk, Walk, Walk, Walk</i> 13. <i>Apple Pie</i>
その他	<ol style="list-style-type: none"> 1. <i>Trick-or-treat</i> 2. フルーツバスケット 3. ハロウィーンの福笑い 4. 信号ゲーム (<i>Green Light, Red Light</i>) 5. 仲間のカード集め 6. 単語で陣取りゲーム 7. 単語の分類ゲーム 8. <i>What's the time, Mr. Wolf?</i> 9. <i>Simon Says...</i> のゲーム (<i>run, jump, sit down, stand up, walk, skip, dance</i>) 10. <i>Go-Go-Stop</i>

2002年度の進め方としては、日本人指導員が教案を作成し、幼稚園にファックスして、担任教師に内容に無理がないか、目的や分担、流れなどの確認をしてもらう。その一方で、教案を外国人指導員に伝え、打ち合わせをする。年長3クラスは前垣内が教案作成と指導を行い、年中5クラスは日本人指導員が打ち合わせて教案作成を行い、前垣内が3クラス、米田が残り2クラスの指導を行うという基本方針をとった。通年の活動回数としては今年の27回くらいになる予定である。

第4節 指導方法と外国人指導員の導入について

過去2年間は外国人指導員がいなかったため、日本人指導員が英語のみを使用し、担任教師が子供の理解を助けたり、ゲームのやり方など必要なところで日本語で説明するという方法を取ってきた。その中で、英語ばかりを使っていることにより、子供がストレスを感じていると思われることがあった。また、必要に迫られて日本語で説明する場合、まず担任教師に耳打ちし、担任教師が理解した上で、子供たちに伝えることになり、その分、活動の流れやリズムが崩れるという問題もあった。日本語に甘んじればそのまま引きずられてしまうが、全く使用せずストレスになるのも困るというジレンマがあった。しかし、今年度からは外国人指導員が加わる事になったので、担任教師は子供の参加態度や問題があったときの対応に専念でき、日本人指導員が子供の理解と外国人指導員の指示の橋渡し役をするということができるようになった。

外国人指導員の導入に当たって、保護者の多くは「外国人に直接習える」と大いに前向きであるが、その反面現場の教師はもっと現実的である。実際、2002年3月に持った打ち合わせ会では、外国人指導員1人による活動は、幼稚園教師との意思疎通が難しいことからやめて欲しいという要望が幼稚園側から出された。その際、以前は幼稚園教師のみが日本語を使っていたが、外国人指導員が入るのならば日本人指導員が日本語をもう少し話した方がスムーズに進むのではないかと、この意見も出た。実際、今年度は従来よりも日本人指導員が日本語を話すという方向になっている。

ここで外国人指導員が参加した事による利点と問題点について述べる。外国人指導員が加わった事により、発音、イントネーション、しぐさに至るまで「本物」に子供たちが触れる事ができる。これはノン・ネイティブにはできないことである。しかし、問題がない訳ではない。日本人指導員にも共通する事であるが、「外国語教師」として必要な知識と資質が必要である。しかし、1週間に数時間という枠だけで外国語教師としての資格を持つ外国人を正式に雇用する事はほとんどの場合できないであろう。ネイティブ・スピーカーであるという事で指導員になる外国人指導員は、多くの場合、外国語教師としての資格や知識を持っている訳ではないし、出身国で教員免許を持っている訳でもない。筆者が知っている例では、子供そのものが好きではないがとにかく教えたという例で、いつもできる子供ばかりが中心で、先生は言う事を聞かない子供にすぐ腹を立て、結局子供は英語が嫌いになりやめたという話を聞いた。この例でも分かるように、子供が小さければ小さいほど、子供とは同様なものかという理解と指導技術が必要となる。我々のように1週間に20分という限られた時間に限られたポイントを教える事によって効果を上げていこうとする時、指示の表現一つを取っても、外国人教師は「自然すぎて」様々な表現を用いてしまい、子供たちを混乱させる事もある。

米田 佐紀子・前垣内 紀三子

我々の場合、幸いな事に、子供が好きでベビーシッターの経験を持つ人が見つかった。外国人指導員が子供好きであり、子供に慣れていて子供がどういうものであるかを把握しているという点で、とても助かっている。しかし英語教育としての英語活動においては、日本人の子供がどのようなものかを知っている日本人指導員が作成し、その教案を外国人教師が行うという“間接的”なものになってくる。教案についてポイントを細かく説明する事に加え、子供たちの反応を細かく読み取って、「もっと繰り返させたほうがいい」、「スピードを落とす」、といった指導現場での日本人指導員の手綱さばきが重要になっている。このように、どのように教材を提示し、発音し、繰り返させるかなど具体的な指導法の細かい打ち合わせが常に必要であるし、その事を外国人指導員に理解してもらう必要がある。

理想論になるかもしれないが、一番望ましい指導員は、日本人であっても外国人であっても、日本語も英語もネイティブ・スピーカーのように使える英語力がある者で、幼稚園・小学校の教員免許を持つあるいはその知識・資質を持つ者であるといえよう。

使用教材一覧

- Beall, Pamela Conn and Susan Hagen Nipp. (1981). *Wee Sing and Play: Musical Games and Rhymes for Children*. [with a cassette tape]. Los Angeles: Price Stern Sloan.
- . (1984). *Wee Sing for Christmas* [with a CD]. Los Angeles: Price Stern Sloan.
- . (1998). *Wee Sing Games, Games, Games* [with a cassette tape].
New York: Price Stern Sloan.
- Carle, Eric. (1987). *The Very Hungry Caterpillar*. [Large Format Edition].
New York: Scholastic Inc.
- French, Vivian and Jane Chapman. (1999). *The Story of Christmas*.
Hong Kong: Candlewick Press.
- Hill, Eric. (1998). *Where's Spot?* [Large Format Edition]. London: Penguin Books Ltd.
- Martin, Bill Jr. & Eric Carle. (1991). *Polar Bear, Polar Bear, What Do You Hear?*
[Large Format Edition]. New York: Henry Holt and Company.
- Swears, Linda & Lorna Lutz Heyge. (1991). *The Kindermusik Series* [with cassette tapes].
North Carolina: Music Resources International.
- Ziefert, Harriet. (1985). *Where's The Halloween Treat?* New York: Penguin Books.
- 『アルク地球っ子プログラム エンジェルコース』アルク 2001
- 中谷 真弓 (1998). 『エプロンシアター くいしんぼゴリラ』株式会社メイト
- . (1998). 『エプロンシアター 3びきのこぶた』株式会社メイト

(米田佐紀子)

第二章 聞き取りテスト

本年度は米田と前垣内が外国人指導員と3人で担当していることから、年中児と年長児の両方に同じ聞き取りテストを行うことによって、子供たちが英単語を聞き取る力はどのくらいあるか、年長児は2年目になっていることから2つの学年の間に差が見られるかどうか、という2点についてみることにした。

第1節 テストの目的と方法

目的・方法・結果については以下の通りである。

目的：

1. 4月からの英語活動で学んだ英単語の聞き取り能力を調査する。
2. 年中児と年長児に差が出るかを調査する。

テストの方法：

1. 昨年行った問題の抜粋（図1）を練習用に1人ずつに配る。
2. ルールを日本語で説明する。
 - (1) 指導員が読んだものにまるをつける。
 - (2) 隣の人と相談したり見たりしない。
 - (3) 分からなければ分からないと手を挙げ、指導員と担任教師に「？」をつけてもらう。これによって子供達は分からなければ素直に分からないといっても構わないこと、指導員も子供が答えられなかった事が明確に分かり、○をつけ忘れたからではない事が分かる。
3. ルールの確認が終わったら実際に練習をする。
4. 外国人指導員が単語を2回読む。
5. 分からないという子供は手を挙げ、指導員か担任教師にテスト用紙の該当箇所に「？」マークをつけてもらう。
6. 全員がやり方を理解したところで、問題（図2）を配布し、同様のやり方で実施する。

図1 聞き取りテスト用紙 練習用

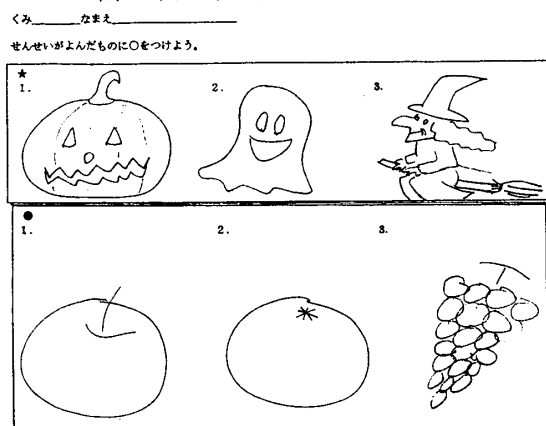


図2 聞き取りテスト用紙



第2節 単語の聞きとりテストの結果と考察

実施した学年と人数は、年中児が107名、年長児が65名であった。ここで、表にその結果を示す。ここでは実数を上に示し、その下には（ ）内に一般的な百分率によって正解率を示した。

表 聞き取りテストの結果

問題	正解		不正解		分からない	
	年中	年長	年中	年長	年中	年長
1★ 1. Jack-o-lantern 2. ghost (正解) 3. witch	69 (64.5%)	62 (95.4%)	11 (10.3%)	1 (1.5%)	27 (25.2%)	2 (3.1%)
2◆ 1. polar bear (正解) 2. lion 3. hippo	67 (62.6%)	60 (92.3%)	7 (6.5%)	0 (0%)	33 (30.8%)	5 (7.7%)
3▲ 1. brother 2. sister 3. father 4. mother (正解)	68 (63.6%)	60 (92.3%)	17 (15.9%)	0 (0%)	22 (20.6%)	5 (7.7%)
4● 1. head 2. hand 3. foot (正解)	47 (43.9%)	32 (49.2%)	29 (27.1%)	6 (9.2%)	31 (29.0%)	27 (41.5%)

本来は文の聞き取り能力テストをしたいのだが、昨年の事を踏まえて、今回も単語レベルとした。昨年はまず実験的に文レベルの聞き取りテストをやってみた。年中児を対象に、英語活動で行った『3びきのこぶた』の絵本の場面を抜粋コピーして並べたテストを作り、担任教師が日本語で「先生のお話は一体どの絵と一緒にですか？一緒に絵にまるをつけてください。」というものであった。しかし、日本語でも混乱してできない子供がいた。日本語でできないものを英語でやるという事は、「英語ができない。だから嫌いだ。」という子供を作り出す事になりかねないのでこの方法はやめ、単語レベルで作り直すことにした。この事を踏まえ2学年の差を見るために年中に合わせた単語テストを年中と年長の両学年に行う事にした。

実施に当たっては、年中児は担任教師、外国人指導員、日本人指導員2人の4人で行った。年長児は日本人指導員1人を除く3人で行った。

最上段の「★」マークの欄は、テスト直前に行っていたハロウィンから題材を取った。カボチャ提灯 Jack-o-lantern, オバケ ghost, 魔女 witch の中から ghost を選ぶというものであった。昨年の結果では、年中でも多くの子供が正解をしていたが、今年度の正答率は年中児で64.5%であった。それに比べ年長児は95.4%が正解をしている。一方、分からないと答えた年長児が2名しかいなかったのに比べ25%にあたる27名の年中児が分からないと答えている。

次の問題2段目の「◆」では、1学期に行った *Polar Bear, Polar Bear, What Do You Hear?* に出てくる動物から出題した。白熊 polar bear, ライオン lion, カバ hippo の中から polar bear を選ぶというものであった。結果は年中児は62.6%にあたる67名、年長児92.3%にあたる60名が正解であった。不正解は少なかったものの、1番の問題と同様、年中児33名が分からないと知っている。

3段目の「▲」は、家族員、父 father、母 mother、姉妹 sister、兄弟 brother から母 mother を選ぶものであった。年中児が63.6%にあたる68名が正解しているのに対し、年長児は92.3%の60名が正解をしている。ここでも年中児の2割は分からないと知っている。

最終問題の「●」は他の形式と異なり、全身の絵の中に番号が書いてあり、1の head、2の hand、3の footのうち、footを選ぶものであった。これに対して年中児は正解が43.9%にあたる47名、不正解が27.1%の29名、分からないが29.0%にあたる31名であった。1番から3番まで9割以上が正解だった年長児は49.2%にあたる32名が正解、9.2%にあたる6名が不正解、41.5%に当たる27名が分からないとしている。

今回のテストの結果だけで英語活動の善し悪しを決めるのは性急であるが、いくつかの考えるべき点がある。

- (1) 年長児はいずれの問題においても年中よりできており、2年間の成果が出ていると考えられる。
- (2) 昨年の年中児に対するテストの結果と比べて、今年の中児の答えには大きな特徴―「分からない」という答えが多い事―が見られる。しかも、「分からない」と「不正解」の両方を合わせると、各項目の3割5分から5割もの子供が分かっていないまま英語活動をしていた事になる。しかし、日常の英語活動の様子から考えるとそれほど多くの子供たちが単語の意味すら分かっていなかったとは考えにくい。その辺りの理由の特定が必要である。
- (3) 両学年ともに、1, 2, 3番の正解率にあまり差は見られないものの4番の体については大きく下回っている。この原因はいくつか考えられる。まず、問題の形式が他と異なっていた事。もし顔、手、足の3つが上の3つの問題と同じ形式になっていたら混乱しなかったかもしれない。また、footは「あし」と子供が捉えた場合、「脚」にも「足」にも捉えられ「脚」と思っていた子供がいれば該当する答えが無いと考えたかもしれない。テスト形式への慣れや選択した語彙、配列等も正当率に反映しているかもしれない。
- (4) 年長児については単語レベルだけでなく文レベルのテストも行うことによって、どの程度まで英語を聞いて理解するのか調べる事ができるのではないか。

第3節 まとめ

今回の聞き取りテストではいくつか課題が示された。まずテスト方法の信憑性である。子供の中には、手を挙げると先生が自分のところに来てくれて何か書いてくれるのでそれがうれしくて手を挙げている子供もいた。そのような子供はこれが答えではないかという予測があっても「分からない人は手を挙げて」といわれるとつい挙げてしまうようだった。実際、筆者が遭遇した場面でも、自分でこれではないかというように、絵を指で差し示しつつ手を挙げている子供がいた。そのような場合、「それだと思うなら、そこに丸をつけていいんだよ。」という丸をつけるという事があった。年齢が小さいだけにテストの実施方法そのものも今後検討していく必要がある。

年中児の正答率が低かったことについて、米田自身の年中の子供で試してみる事にした。米田の子供は日頃から英語のビデオや外国人に触れる事が通常より多少多いかもしれないが、日本語で生活し、日本語の保育所に通っているのも基本的に該当の幼稚園児と差はないと考える。その子供が自信を持って楽しそうに答えたのは1番目と2番目の問題で、3番目になると少々不安気になり、4番目に至っては“foot”という番号とは関係のない「すね」を指さした。手や目といったなら正当率が高かったのかもしれないと考えた。子供たちに定着しやすい語彙の研究をし、それに基づい

でテストをする事が信憑性の高いテスト作成につながるのかもしれない。

テストによって日頃の英語活動の指導の反省をすることができる。日頃の英語活動ではいわゆる「できる子供」「元気な子供」のペースで活動が進んでいく可能性があるが、テストは目立たない子供たちの理解を示してくれる。その反面、テストが子供の本当の力を示しているかを見極める事も大切である。1度のテストですべてを知ろうとする事も危険である。

以上の事から、今後もテストの内容・形式を改良しつつ子供たちの理解度を調査し、指導に生かしていきたいと考えている。

(米田佐紀子)

第三章 英語活動に関するアンケート結果と分析

昨年に引き続き、2002年10月下旬に英語活動に関するアンケートを実施した。英語活動以外の子供たちの様子だけでなく、日常生活との関わりについて情報を得るため、保護者と幼稚園教師の両方にアンケートを実施した。アンケート提出があったのは、年中児（在籍111名）の保護者90名、年長児（67名在籍）の保護者56名、幼稚園教師が8名であった。集計は年中、年長そして幼稚園教師とに分けてまとめた。

なお、アンケート実施の時期であるが、今回は授業参観直後に行ったため、保護者の英語活動そのものに対する具体的な意見も多数見られた。

第1節 結果と分析

1. この幼稚園で英語活動を行っていることはご存知でしたか？

	年長	年中
知っている	37	54
知っていて、幼稚園を選ぶ際の参考にした	4	10
子供が幼稚園に入るまでは知らなかったが、今は知っている	14	25
知らない	1	1

英語活動を始めて3年目になるので、前年に兄弟・姉妹がもうすでに活動をしていたなどということもあり、ほぼ全員の保護者が英語活動を知っている。また、知っていて幼稚園を選ぶ際の参考にしたという保護者も年中の中では10名で、全体の約1割になることがわかった。

2. 幼稚園から英語活動を行なうことについてどう思われますか？

	年長	年中	教師
賛成	53	74	7
反対	0	0	0
よくわからない	3	5	1

ほぼ全員の保護者、幼稚園教師が英語活動に賛成と答えている。今年から始まった小学校での英語活動が影響しているのであろうか。次に賛成と答えた理由についてみていく。

幼稚園における英語活動の実践的研究

3. 2で「賛成」とお答えになった方は、その理由に○をつけてください。(複数回答可)

	年長	年中	教師
英語圏の文化に触れるチャンスだから	23	50	5
異文化や異言語に対する興味を早くから育てられるから	19	50	5
異文化や異言語に対する偏見やコンプレックスをなくせるから	9	18	
外国人と話せるようにしたいから	7	13	
楽しそうだから	33	47	4
小学校でも英語が始まると聞いたから	18	34	2
将来英語の成績がよくなると思うから	1	3	
外国語の習得は小さいときから始める方がいいから	20	39	3
よい英語の発音を身につけて欲しいから	18	25	4
英語のリズム感を身につけて欲しいから	12	24	4
学校でないので意識せず、自然に英語の語感や聞く力を身につけられるから	36	46	4

目立った意見としては、「学校ではないので意識せず、自然に英語の語感や聞く力を身につけられそう」や「楽しそうだから」というものであった。この2つは教える上においても、最も注意している点である。また関連して、「よい英語の発音を身につけて欲しいから」「英語のリズム感を身につけて欲しいから」という意見も多く見られた。このことは言語習得理論でも、幼児期から言語を習得する大きな利点と言われているが、それを保護者も生かして欲しいと考えていると捉えられる。

「英語圏の文化に触れるチャンスだから」「異文化や異言語に対する興味を早くから育てられるから」という考えに賛成なのは、保護者だけでなく幼稚園教師にも多く見られた。コメントの中で、毎年行なっている Halloween の時期の活動は、通常の活動とは違う事をしている点や日本にはない異文化の行事である事から、園児もとても楽しみにしているという意見が多くあった。またこういった行事を他にもして欲しいという意見もあった。

実際、英語活動をしている時に気づいた事であるが、例年と異なり、教室の飾りに Halloween のものを壁に貼っていた教室があった。幼児にとって大切な環境構成の中で、英語活動の内容を取り入れることは、言語学習本来のトータル的な刺激ができ、望ましいことである。こうする事によって、英語という言語だけでなく、文化的な視野も子供たちに持たせることができると考える。

4. 幼稚園での英語活動に何を期待していますか？(複数回答可)

	年長	年中	教師
英語圏の文化に触れ、慣れること	23	50	4
将来、外国人と話せるようになること	6	9	0
小学校英語の予習	6	13	1
子供が楽しく英語を学ぶこと	56	83	6
将来、英語の成績がよくなること	1	1	0
よい英語の発音を身につけること	18	34	4
外国の言語や文化に対する興味を育てること	21	36	5
英語の単語を増やし、覚えること	6	18	1
英語の歌や遊びを覚えること	16	37	2
特に何も期待していない	2	0	0
その他(具体的に)	0	1	0

米 田 佐紀子 ・ 前垣内 紀三子

ここでも先ほどの結果と同じように、保護者と幼稚園教師どちらも、まずは楽しく英語に触れ親しむ、ということを期待している。活動時間が短いということや、異言語の中での子供の集中の継続力から考えて、活動内容は、子供たちの年齢にあった親しみやすい歌や指遊び、または踊りなどを中心としている。英語で書かれた絵本も必ず1冊は取り入れ、読み聞かせ、または声を出して指導員と一緒に読むことも行なっている。これらもまた、異文化に触れるよい機会ではないかといえる。「小学校英語の予習」という意見はわずかではあるが、小学校の英語活動に関係した意見がアンケート全体を通していくつか見られたことから、まず幼稚園では外国というものに意識を向けさせ、興味を湧かせる。それに伴う言語を自然と取り入れていく、そして小学校に引き継いでいくという事が前提にあるのだと思う。その他の意見の中に、「耳の発達は小さい時で決まるので、聞く力を身につけて欲しい」というものがあった。やはり、幼児期にある子供を対象に活動を行なう事から、理論やルールなどではなく、体で覚えるものを期待しているといえる。

5. (保護者用) ご自宅で、英語に関することをなさっていらっしゃいますか？

	年長	年中
している	21	29
何もしていない	35	59
無記入	0	1

(教師用) 通常の授業で、英語に関することをなさっていらっしゃいますか？

している (具体的に)	2
何もしていない	6

普段の保育の中に英語を取り入れている幼稚園教師がいるということがわかった。例としては、「ゲームで1~10までを英語で数える」や「前回の英語活動で出てきた単語を練習する」等である。

6. 5で「している」とお答えの方は、具体的に何をなさっていらっしゃいますか？

	年長	年中
英語または英会話の塾に行っている、あるいは家庭教師に習っている	6	6
英語のテレビ番組やビデオを見せたり、ラジオやテープを聞かせている	0	16
日頃の家庭での会話でも英語や異文化に興味を持つような話しかけをこころがけている	1	5
一緒に身近なものを英語で言ったり、英語の歌を歌ったりしている	11	12
子供が英語で何か話をしたときは、ほめてやる	10	13

最近、早期英語教育が盛んに行なわれてきているためもあつてか、英語に触れる環境を作っている家庭が多い。「英語を習いたいと言いだした」という意見もあり、塾や家庭教師を始めている家庭も多い。

アンケートの中には、「幼稚園で習ってきた事を教えてくれるので一緒に会話をする」や「車で聞く音楽に洋楽をリクエストするようになった」等と、保護者から環境作りをするというよりは、子供たちが英語に興味を持ち出したことによって、家庭での英語の環境作りが出来ていることもわかった。今年度より小学校での英語活動が始まったため、「小学生の兄が学校で習った英語の話をすると、自分も幼稚園で習った事を言う」、「姉(小2)や妹と一緒にしている」などと、兄弟・姉妹たちによって積極的になっていることもわかった。特にこの幼稚園がある地域は、小中英語一貫

幼稚園における英語活動の実践的研究

教育研究指定校の地域であるため、それが影響しているとも考えられる。また、「テレビ番組を見ている」という意見も多かった。「とても刺激されるようで朝から喜んでいる」という意見からもわかるように、子供たちが英語活動によってとても刺激され、それによって自分から興味を持ち、進んで英語に触れるという姿勢は、英語活動をやっている結果としてとても理想的ではないかと思う。

7. (保護者用) この幼稚園で英語活動を始めてから、英語や異文化に対するお子様の態度などに何か変化があったと思われますか？

	年長	年中
はい	46	71
いいえ	8	13
わからない	2	0
無記入	0	2

(教師用) この幼稚園で英語活動を始めてから、英語や異文化に対する園児の態度などに何か変化があったと思われますか？

はい	7
いいえ	0
(年中の保育者より) 1年目なので以前様子はわかりません。	1

保護者、教師とも変化があったと多く答えている。以下8番では、保護者からの意見を挙げ、考察し、その後で教師からの意見を見ていく。

8. 7で「はい」とお答えの方は、具体的にどういった変化がありましたか？その変化をどのような時に感じましたか、良ければ具体例を該当欄の横にお書きください。(複数回答可)

(保護者用)

<年長>

- ・英語活動の内容を楽しそうに家で話す。
- ・「〇〇は英語で何て言うの？」と聞いてくる様になった。
- ・帰宅して、何気なく英語の歌を歌っている。
- ・スーパーなどへ行った時「これは、何々よ！」と単語を言うようになった。
- ・知らないおばさんに「今、何歳？」と聞かれて、「I'm six!!」と叫んでビックリされた。
- ・友達どうして名前や歳などを聞いたり言ったりしている。
- ・色を表現する時に“black”とか“red” etc 口にしたりすることがある。
- ・先日マイクロペットのネコを買ってあげた時、その猫に「ピーチ」という名前がついていて、うちに「もも」という名前のネコを飼っているのですが、「どっちも“もも”だねえ～」と話してくれました。ちょっと感心してしまいました。

<年中>

- ・先生の名前・先生の様子を教えてくれる。
- ・Halloween を楽しみにしていた。
- ・玉ねぎが出てきた時に onion ととてもいい発音で言った。
- ・(本人の)歌う歌が、英語の歌が増えた。
- ・発音良く単語を言っているのでびっくりした。

米田 佐紀子・前垣内 紀三子

- ・自然に「ありがとう (Thank you)」や「またね (See you!)」など言うようになっている。
- ・知っている単語が出てくると、英語でこう言うのよと教えてくれる。
- ・たまに朝や夜のあいさつを英語で言う時がある。
- ・物を指差し英語で何と言うか質問するようになった。自分の知っているものは教えてくれる。

具体的に保護者の意見を見ていると、子供が想像以上に英語に興味を持ち、また着実に定着している事がわかる。子供は特に「知っていることを教えたい」という気持ちを持っている。英語活動で少しでも多くの英語を覚えて家に帰り、家族に教えたいという気持ちが、子供たちが活動に積極的に参加する結果になっているということも今回見ることができた。

上記以外に、今年度より加わった外国人指導員に関する意見が次のように見られた。

<年長>

- ・先生にも何も抵抗なく接している。
- ・公園で外国人と一緒にになり、色々聞かれた事に英語で答えていた事に驚きました。
- ・外で外国の人に会っても特別視しない。
- ・英語圏の文化 (クリスマス等) を楽しんでいる。

<年中>

- ・テレビのニュースを見ていて、「あの人、なに人?」「英語喋れる?」と聞いてくる。
- ・外国の人が身のまわりにいないので、本人にとって“すごいこと”だったようです。
- ・〇〇先生って外国の人なの。
- ・逆に前より興味が出たみたい。
- ・外国人を見つけると話しかけるようになった。
- ・日本語と同じように違和感がないようだ。
- ・外国人の先生に会えるのが楽しみみたいです。

5月より外国人指導員が加わったが、特に年中では初めのうち何人か泣き出す子供もいた。また外見的に全く違うことから、「見て、目が青いの」「髪がきれい」等の声もよく聞いた。大人とは違い、見て見ぬふりは幼児期の子供には出来ない事であり、不思議そうにじっと見つめている事もあったが、毎週活動で会っているうちに外国人も自分たちと同じ人間で何も変わらないのだと徐々に分かってきたのだろう。英語の質問が理解でき、それに対する自分の返答を外国人指導員が理解してくれた時の喜びはとても大きいようで、「やったあ!」と喜ぶ声も、活動中聞くことがある。

(教師用)

7で「はい」とお答えの先生は、具体的にどういった変化がありましたか?その変化をどのよ
うな時に感じましたか、下の番号でお答えください。

[5 全くその通りだ、4 まあその通りだ、3 どちらとも言えない、2 あまりそうではない、1 全然そうではない]

	1	2	3	4	5
日常生活の中で英語を口にするこどもが多い。	0	1	1	3	2
外国の人に対しての抵抗感が減り、親しみが増したように思うこどもが多い	0	0	5	1	0
英語や外国語に対しての抵抗感が減り、積極性が増したように思うこどもが多い	0	0	3	1	2
英語活動を楽しみにしているこどもが多い	0	0	2	3	2

幼稚園における英語活動の実践的研究

英語活動をいやがっている子どもが多い（もし理由がわかれば書いて下さい。）	2	4	0	0	0
何かの時に英語の歌や遊びが流れると興味を示したり、一緒にやろうとする子供が多い	0	2	2	1	1
子供たちに英語のリズム感が身に付いてきたように思う	0	0	4	2	
こどもの英語の発音がよくなったように思う	0	0	2	3	1
通常の園生活で何事にも活発な子どもは英語活動にも積極的だというような、「相関関係」が見られると思う	0	1	2	2	1

本来各項目の合計が8になるはずであるが、記入がなかった回答もあった。ここでは記入のあったものの合計で示している。

ここでは保護者の意見とはまた少し違った意見が見られる。例えば、保護者の意見からは外国人指導員を加えた事によって、外国人に対する抵抗感が減り、親しみが増えたように思うという意見が多く見られたが、教師の意見からはそれほど大きな変化は感じ取れないようだ。しかしながら、その他の意見では、「果物の名前を急に英語の発音で言う」や「今日英語だね、と話す」などが挙げられた。

9. お子さんを見て英語活動についてどのように感じていらっしゃいますか？ご自由にお書き下さい。

- ・（参観して）とても楽しそうで、みんなイキイキしているように見えた。
- ・小学校に入っても、英語の授業に自然に入れそうで良かった。
- ・家でも弟に英語で単語を教えてあげているので、良い事だと思う。
- ・先生が目線が子供たちの高さで話しているのが良いと思う。
- ・英語は見て（TV・Video等）いるものだったが、先生と直に話せる楽しさを覚えてよかったです。

10. 今後活動でやって欲しい事がありましたら、何でも自由にご記入下さい。

- ・どんな内容で英語活動をしているのかを分かるようにして欲しいと思う。
- ・もう少し時間を長くして欲しい。
- ・外国人の先生を増やして欲しい。白人だけでなく、黒人も。世界には色々な人種がいることを知ってもらいたいです。
- ・英検の団体申し込みができないか。
- ・お友達と簡単なロールプレイング。
- ・英語を教えるというよりも、外国人の方と一緒に楽しく英語を口にする場であって欲しいです。

以上は多く見られた意見のうちの抜粋であるが、それ以外にも「英語活動の中では、先生方が日本語を使わない方が良いのでは」という意見や、また反対に「先生が英語でしかお話しませんが、子供たちはわかっているのでしょうか？」という意見もあった。基本的に指導員は英語のみ使用という形で活動を行っているが、英語だけで理解させるのは難しい場合は幼稚園教師が日本語でのサポートをしている。また、本年度より外国人指導員が加わったため、日本人指導員が必要に応じて日本語を使う割合が多くなったのも事実である。それと同時に幼稚園教師からは「基本的には日本語は使わない方が良いが、英語だけでは子供たちが理解できないこともあるので必要だと思う」「私だけでは補助できない部分もあるので、日本人指導員の方がいてくれて解説してくれることに

米田 佐紀子・前垣内 紀三子

より、子供たちも分かるし、私もそれに加えてお話できるので良いと思う」という意見もあった。

またここで注目したいのは、保護者が英語活動を知る手立てが年に1度の参観日と子供たちからの情報によるものだけのため、活動の目的や内容が正確に伝わっていないという点である。例えば、アルファベットは幼児期の子供たちにとっては早過ぎるため、導入をしていないが、保護者の中の意見には、「ABCの歌を歌っているのですが、所々間違っていました」等の意見があり、保護者に向けての活動内容や目的、指導方針等を知らせる必要性を感じた。

また、「発音」について次のような意見が様々みられた。

<肯定的>

- ・アクセントのつき方が変わってきた。
- ・自然に、ごく自然に発音が身に付いている。
- ・日本語で話すのと違って英語を話す時は、語尾の上げ下げを意識しているようだ。

<否定的>

- ・中途半端なのは良くないと思う。
- ・やるなら1人1人の発音から確実にできるようにして欲しいです。
- ・カタカナ英語でちょっとがっかりでした。

特に年中の保護者から発音に対する否定的な意見が多かった。年中・年長を指導している立場からすると、この1年の差はとて大きく、「教育」そのものが長い目で継続的・体系的に見ていくべきものであるという事を理解してもらう必要があると感じた。例えば、昨年度の年長と今年度の年長を比べると、違いが大きく、今年度の年長の方が定着度、積極性、あるいは理解度の全てにおいて高いと感じている。そして、その理由は年中から活動を始めたということにあると考える。つまり、年中での活動を経験したゆえに年長での手応えに繋がると言えるだろう。また、年長担任の幼稚園教師からも、指導員の感触を裏付ける意見が出ている。例えば、「同じ内容でも年中の頃よりも理解が増している」「反応の早さや動き、声の大きさなどにも自信が見られる」との意見である。2年目に入った年長の保護者からも「年中の時は、あまり英語活動の話はしてくれませんでした。最近をよく話してくれます」という声が出ている。発達段階からして、年中は年長より未熟である。認知力・理解力についてもしかりである。音の認識ができなかったり、うまく口が回らないこともあって当然である。「幼児期だから良い発音が簡単にできる」という事をすべての子供に望む事はできない。実際、幼児言葉・幼児発音というものが存在するのである。

発音については活動を始めた当初から重視している点であるため、これらの意見をどう捉え、それと同時にどう対応していくかという問題提示となった。「教育」そのものが長い目で継続的・体系的に見ていくべきものであるという事を理解してもらう必要があると感じた。

第2節 まとめ

以上見てきたように、アンケートによって指導員が見ることができない子供たちの姿を見る事ができた。

英語学習にとどまらず、教育は子供本人・指導者・家庭・社会という全体の中で行われていくべ

きものである。大切な幼児期であるがゆえに、幼稚園での指導と家庭での教育が一致する事が望ましい。そういった点からも保護者に向けて英語活動についての「情報発信」が必要であろう。

また、今回出てきたさまざまな意見を参考にしながら、今後の英語活動に生かして行きたいと考えている。

(前垣内 紀三子)

結論

本稿では3年目に入った幼稚園での英語活動についての実践報告をしてきた。英語活動の指導員に外国人指導員が加わり、年中・年長と2年間にわたる活動になったことによりどのような変化が見られるかを中心に考察してきた。

外国人指導員については、指導に加わる事の意義と同時に、問題点も述べた。今後は「英語だからネイティブ・スピーカーまたは外国人」という視点ではなく、教師としての能力や資質にポイントを置いた指導員の養成が望まれる。

第二章では、聞き取りテストの実施と考察を行ったが、年中児の結果が6割の正解率ということから、今後の活動の工夫とテストそのもののやり方に対して示唆を投げかけた。

第三章では、保護者と幼稚園教師に対して行ったアンケートをまとめ、考察した。指導そのもの、また子供の英語学習に対する環境作りに関する保護者への情報など、指導員が今後していくべき事柄が浮かびあがってきた。

1週間20分ずつの活動であるとはいえ、歌・指遊び・踊り・絵本など様々なことがらを通して、子供たちは英語という言語と文化に触れてきた。今年度は特に外国人指導員が加わった事によって英語そのものに加え、外国人と直接話そうとする意欲も子供たちに湧いてきたのではないだろうか。この活動がこれからも子供たちが英語に触れていく中で、意欲的に英語学習に取り組む姿勢につながり、特に発音や聴覚理解の際にこれまでの活動が生かされることを強く願っている。

[参考資料]

『アルク地球っ子英語プログラム エンジェルコース』アルク 2001

中山 兼芳編 『児童英語教育を学ぶ人のために』 世界思想社 2001

Gleason, Jean Berko & Nan Bernstein Ratner. (Ed.). (1993). *Psycholinguistics*.

New York: Harcourt Brace Jovanovich College Publishers.